

東洋と西洋の

向田邦子

新潮文庫

日本音楽著作権協会 第 8562136-803 号
(出) 許諾番号

だ かつ
蛇 蠍 の ご と く

新潮文庫

む - 3 - 8



昭和六十一年三月二十五日 発行
昭和六十三年八月十五日 三刷

著 者 向 田 邦 子

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 新 潮 社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(〇三)二六六一五一一

編集部(〇三)二六六一五四四〇

振替 東京四一八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社 製本・株式会社植木製本所

© Sei Mukouda 1982 Printed in Japan

新潮文庫

だ かつ
蛇 蠍 の ご と く

向田邦子 著



新潮社 版

3584

目次

蛇蠍のごとく……………	七
きんぎよの夢……………	二五
母上様・赤澤良雄……………	二九
毛糸の指輪……………	三七
眠り人形……………	三五
びっくり箱……………	四五

解説 石井ふく子

蛇^だ
蠍^{かつ}
の
ごとく

蛇^だ
蠍^か
の
ご
と
く

●本文中の記号の意味は左記の通りです。

S E (音響効果) **F・O** (ゆっくり消えていく) **N** (ナレーション)

●スタッフ

制作 藤田 道郎
演出 江口 浩之
布施 実

●主なキャスト

古田 修司	小林 桂樹
古田かね子	加藤 治子
古田 塩子	池上季実子
古田 高	横山 政幸
梅本 庄司	高品 格
梅本 須江	内海 桂子
石沢 清孝	津川 雅彦
石沢 環	加賀まりこ
佐久間晃一	小林 薫
青木ミナミ	原 悦子
宮本 睦子	佳那 晃子

蛇蠍のいづく

NHKテレビで3回連続放映

昭和56年1月10日～24日

1

● 渋谷。パルコあたり（昼）

こぢんまりしたビストロ。表に出ているメニューを、メモしている中年男が、ドラマの主人公、古田修司（53）。本日の定食五千円ナリをメモ。更に電話番号も控える。若いサラリーマンやOLで溢れる通りを歩き出す修司。

● パルコ裏通り（昼）

謹厳な顔で真直ぐ前を向き、歩いてゆく修司。

しかし、その目は、せわしく右、左に配られている。右も左もラブホテル。

物色しながら歩いてゆく。料金にもすばやく目を配る。

地味な構えの一軒を横目で見る。

向うから、中年の主婦風の女がくる。さりげなくやりすごし、パツと飛び込む。

●ラブホテル・受付

フロントの修司。

修司「恐縮ですが、部屋——見せて頂けるでしょうか」
フロントの男、キョトンとする。

●ラブホテル・客室

派手なダブルベッド、鏡などの調度を、緊張しながら拝見する修司。
立っている案内係のオバサン。

修司「あの——」

修司、のぼせているので、ヘンなところから声が出てしまう。

修司「この部屋、予約、お願いします」

オバサン「予約？」

修司「今晚八時半——いや、九時になるな、九時から——二、三時間でいいんですが」
オバサン「お客さん——」

オバサン、小馬鹿にしたような、気の毒そうな顔で——

オバサン「こういうところは、予約ってやってないんですけどね」

修司「えっ、あ、そうですか。ハハハハ、なるほど、そうですか」

●ラブホテル・表（昼）

とび出してくる修司。

さりげなく人の波にまじって歩きはじめる。

●XX鉄鋼KK・ビル（昼）

昼休みの歩行者天国、バレーボールも終りに近い。ぞろぞろと人の波がビルの入口に吸い込まれてゆく。その中に修司がいる。

●第二資材部

仕事をしている修司。まわりの男子社員、女子社員たち。タイプの音。電話の音――

修司「宮本君」

部屋の隅でタイプを打っていた、宮本睦子（むつこ）（26）がくる。

薄化粧のパツとしないタイプ。

修司「これ。AグループとBグループ、別々にタイプしたほうがいいんじゃないかねえ」

睦子「ハイ」

修司「ここ――ここも間、離れた方がいいなあ」

言いながら、修司は、メモを示す。

さっきのレストランの名前、地図、電話番号、待ち合わせ時刻が、几帳面きちようめんに書き込まれている。メモを押しやり、タイプの下に忍び込ませる。

睦子「ハイ——」

修司「じゃあ」

睦子一礼して席へもどってゆく。

つめていた息をフウツと、物凄ものすごく大きく吐いてしまう修司。

みんなが見る。

修司、しかつめらしく、仕事にとりかかるが、右手がこまかくケイレンする。

修司（N）「一生に一度のことをやったもんで、この始末です。こういうのを『小物の証明』

というんでしょう」

修司、左手で右手の震えを押さえながら、睦子がメモを見て、それからバッグに仕舞うしぐさを見ている。

修司（N）「宮本睦子といって年はたしか二十七です。つい一週間ほど前、身の上相談を持ちかけられました。

結婚を約束した男に土壇場で裏切られたというのです。母子家庭の子で——今年いっばいで社をやめて、叔母のやっているバーを手伝うつもりだと言いました。

バーを梯子はしこして、私も酔いました。生れてはじめて、会社の女の子と腕を組んで夜の街を歩きました。彼女の腕が私を誘っていました。

だが、その晩、私は持ち合わせが無かったのです」

修司の手が書類の端に震えた数字をならべている。

夕食代二人分一万二千元。タクシー代——そして、泡くって消す。

修司（N）「あと二月で、やめてゆく女の子です。卑怯なようですが、あとくされありません。これを逃したら、私に、こういうチャンスはもう無いでしょう」

修司、窓の外を見る。

大きなガラス窓にビル。ビル。ビル。

鳩が飛んでいる。

修司「——」

大川「部長」

修司「——」

大川「部長、お電話です」

修司「え？ あ」

大川「お宅からです」

修司「——」

●古田家・茶の間（昼下り）

古い和風の家。

妻のかね子（49）が電話している。

かね子「すみません。お仕事中——」

修司（声）「なんだい」

かね子「今晚帰りは——いつも通りですか」

●第二資材部

電話している修司。

修司「——いや今日は、会議（言いかけて）——寄るところがあるから」

かね子（声）「ちよつと——急いだはなし、あるんですけど」

修司「帰ってからじゃ駄目なのか」

●古田家・茶の間

かね子。

かね子「——お願いします」

修司（声）「なんだい、はなしって」

かね子「塩子、おかしいんです」

かね子、言いかけて、うしろに高（19）が立っているのに気づく。

修司（声）「塩子がどしたんだ」

かね子「あたし、そっちへ行きますから」

修司（声）「おい——」

かね子「五時半に、受付のところに立ってますから」

修司（声）「おい、うち帰ってからだつて」

かね子「それじゃ、間に合わないのよ。あたしがこんなこと言うの一生に一度のことよ。おねがいします」

高、出てゆく。

●第二資材部

受話器を置く修司。

修司（N）「一生に一度が、二つぶつかりました」

タイプの手をとめて、背中で電話をきいている感じの睦子を見る。

修司（N）「なんとも運の悪い男です」

●喫茶店（夕方）

ビルの地下の店。

仏頂面ですわる修司、かね子。

修司「なんだい」